

戦下の研究者支援 愛知から

ウクライナ向けネットで研修

ロシアによる軍事侵攻が続くウクライナの学術研究レベルを維持させようと、愛知教育大の宮川秀俊名誉教授（左）と国際協力機構（JICA）が、ウクライナ人研究者を対象とした産業技術などの研修プログラムに取り組んでいる。ロシアによる侵攻から二十四日で九カ月。攻撃の激化や電力不足で研究の機会が脅かされる現地からは、紛争の終結を見据え「復興に役立てたい」と声がかかる。

愛教大・宮川秀俊名誉教授ら



宮川秀俊名誉教授（手前）らが実施する研修プログラムを受けるウクライナの大学教授ら一名古屋市中村区のJICA中部なごや地球ひろばで

「十五日にポーランド側にミサイルが着弾してから、停電がひどくなっている」。ウクライナ北部にあるスミイ州立大で工学部教授を務めるヒタリイ・イワノフさん（左）は取材に「インターネットは安定せず、停電が多い朝と夕方は研究機材が動かせず、研究がままならない」と嘆いた。イワノフさんによると、スミイ州では毎日百発以上ものロケット弾攻撃が続く。十月以降、全面オンライン化された授業は停電や空襲警報で中断されることもたびたびだという。

イワノフさんは二〇一六年、JICAが実施した産業技術分野の研修を受けるために来日。その縁で、ロシアによる侵攻後、責任者だった宮川さんに連絡し、研究や教育活動がままならない状況を訴えた。

宮川さんはJICAと協

力し、愛知県内の産業技術や労働安全衛生などの研究者によるオンライン研修プログラムを作成。イワノフさんや同僚ら男女十人が十月から毎週受講している。十一月月上旬にはJICA中部なごや地球ひろば（名古屋市中村区）の会議室で、元愛知教育大教授・久永直見さん（右）が産業医学について講義。「戦災復興期にはアスベストによる健康被害の恐れがある」と説明すると、受講者から「被害を避けるにはどうすればいいか」「どうやってアスベストを見分けるのか」と次々に質問が出た。

二十日には中部大情報工学科の岩堀祐之教授（左）が日本の最先端の内視鏡技術を解説。受講者には医学と工学を組み合わせた研究は珍しいという。「画期的だ」と刺激を受けている。

受講するスミイ州立大工学部のクリスティーナ・ペルラティールさんは「研修はウクライナの復興にとても役立つはず」。イワノフさんは「戦争中も教育や研究を続けようとするところこそが重要。日本から学んだ知見を新しい世代に伝えていきたい」と話している。